

この道に思う

隨想



佐藤芳信

私が、学校事務職員になつて、満五年になりました。今更ながら、歳月の早さに驚かされます。十五年前を静かに振り返ると、当時、まとまつた事務の知識がなにひとつなかつた自分への不安と、新しい職場への期待がいっぱいのまま、最初に勤務したのは、小学校でした。校門に入るなり、可愛い子供たちから、かん高い元気な声で「お早ようございます」「お早ようござります」と呼びかけられ、迎えられたことが、昨日のできごとのように懐かしく思い出されます。そして、校長先生から「先生」と言られて、とまどつたことが、はつきりと印象に残っています。

当時、私の仕事といえば、なにからなにまでが初めての経験で、三十六名

の先生に支給する給料計算にして、二・三回計算しないと合わなかつたり年末調整事務がなかなかできなくて、夜遅くまで仕事をしたことが思いだされます。今にしてみれば「ゆとりと充実」などと言って、笑ってすまされることが、当時は、仕事の内容を覚えることで、精一杯。仕事に追われっぱなされます。今にしてみれば、「ゆとりと充実」などと言つて、笑つてすまされる事務は、一部電算化されたが、その事務量は、年々増大するとともに、複雑多様化してきています。このような状況下で、私は、常に「学校事務とはとにかく」あるいは「事務職員のあるべき姿」を毎日の勤務をとおして考えていました。学校事務を考えるとき、特に、児童生徒や教師を切り離して考えることとはできません。児童生徒が健康で明るい、そして充実した学校生活が送られるように、教師が安心して、児童生徒の教育に打ちこむことができるような教育条件整備を図ることが、大切なことがあります。環境の乱れは、生徒指導にも大きく響いてきます。学校の隅

に、校長先生からは、「初めから、なんでもわかる人なんかいないんだよ。一つ一つの経験から覚えていくものだよ。苦しんで覚えたものは自分のものになるんだ」と優しく笑つてご指導くださったことが、今でも私に勇氣と希望を与えてくれています。当時の仕事は全て手計算で電算化されていなかつたし、新採用職員の研修会等もなかつたと思います。ただ同じ地区の事務研修で、実務研修だけであったと記憶しています。

さて、自分のこののような十五年間の経験をとおして、自分なりの考え方、述べてみたいと思います。最近の学校事務は、一部電算化されたが、その事務量は、年々増大するとともに、複雑多様化してきています。このような状況下で、私は、常に「学校事務とはとにかく」あるいは「事務職員のあるべき姿」を毎日の勤務をとおして考えていました。学校事務を考えるとき、特に、児童生徒や教師を切り離して考えることで、精一杯。仕事に追われっぱなされます。今にしてみれば、「ゆとりと充実」などと言つて、笑つてすまされるそれは、備品の購入や設備整備の要求など、数多くの要求が出てきますが、極的に事務を進めてゆべきだと思ひます。教師から事務職員に対し、たえず多くの仕事上の要望がだされます。それは、備品の購入や設備整備の要求など、数多くの要求が出てきますが、常に、そのひとつひとつについてできるだけないは別にして、誠実に対応していくことが大事です。

また、児童生徒の非行を、マスコミ等で報道されるたびに、同じ職場にいる者として、人ごととは言われない心の痛みを感じます。教壇に立つての直接指導はしませんが、教育条件の充実や、校内での望ましい人間関係を一層深め、教育目標達成のために、自分の職務を自覚し、誇りをもつて学校事務の推進に、新たな意欲をもつてあたつてゆきたいと思います。

(浪江町立浪江中学校主事)

に、校長先生からは、「初めから、なんでもわかる人なんかいないんだよ。一つ一つの経験から覚えていくものだよ。苦しんで覚えたものは自分のものになるんだ」と優しく笑つてご指導くださったことが、今でも私に勇氣と希望を与えてくれています。当時の仕事は全て手計算で電算化されていなかつたし、新採用職員の研修会等もなかつたと思います。ただ同じ地区の事務研修で、実務研修だけであったと記憶しています。

真の効果は、事務職員の自主的、自発的な研修意欲から生まれてくるものだと思います。